

落語の濫觴

三遊亭円朝

青空文庫

落語らくごの濫觴らんしやうは、昔時むかし狂歌師きやうかしが狂歌きやうかの開ひらきときに、互たがひに手
 を束つかねてツクネンと考かんがへこ込んで居をつては氣きが屈くつします、乃そこで其
 のあひま合間あひまに世よの中ちゆうの雑談ざつたんを互たがひに語かたり合あうて、一時じの鬱うつを遣やつたの
 が濫觴はじまりでござります。尚なほ其前そのまへに溯さかのぼつて申まうすと、太閤たいかふでん殿下か
 の御前ごぜんにて、安樂庵あんらくあんさくでん策伝さくでんといふ人ひとが、小こさい桑くはの見台けんたいの上
 に、宇治拾遺物語うじしふゐものがたりやうなものを載のせて、お話を仕したといふ。是これ
 は皆みな様さまも御案内ごあんないのことことでござりますが、其時そのとき豊公ほうこうの御ご
 寵愛うあいを蒙かうむりました、鞘師さやしの曾呂利新左衛門そろりしんざゑもんといふ人ひとが、此この事こと
 を聴きいて、私わたくしも一つやつて見たうござる、と云いふので、可笑をかしなお
 話をはなをいたしましたが、策伝さくでんの話はなより、一層そうぎよい御意ごいに適かなひ、其後そののち

たび／＼ごぜん 数度御前に召めされて新左衛門が、種々しゆ／＼滑稽こっけい雑談ざつだんを演えんじ
 たといふ。夫それより後のちに鹿野武左衛門といふ者が、鹿しかの巻筆まきふでとい
 ふものを拵こしらへ、又露野五郎兵衛といふものが出て、露物語つゆものがたりで
 ござりますの、或あるひは露の草紙つゆといふものが出来できました。夫それ切絶きりたえ
このらくごて此落語と云ふものはなかつたのでございます。夫それより降くだつて
てんめい天明四年ねんに至いたり、落語らくごと云ふものが再興さいこういたしました。是これは
まへ前まへにも申まうしました通り、狂歌師きやうかしが寄よつて狂歌きやうかの開ひらきをいたす時とき、
なに何なにかお互たがひに可を笑かしい話はなでもして、ワツと笑わらふ方が宜よからうと云いふ
 ので、二三回くわいやつて見ると頓とんだ面白おもしろいから、毎月まいげつやらうと云い
 ふ事に相成あひなり、蜀山人しよくさんじん、或あるひは数寄屋河岸すきやがしの真顔まがほでございます
 の、談洲楼だんしゅうろう馬うまなど、云いふ勝すぐれた狂歌師きやうかしが寄よつて、唯落語たゞらくご

こしら
 を拵へたまゝ開いても面白くないから、矢張判者を置く方が
 よ
 宜からうと云ふので、烏亭焉馬を判者に致し、乃で狂歌師の
 ひらき
 開と共に此落語の開もやらうと云ふ事になり、談洲楼焉馬
 はんじゃ
 が判者で、四方の赤良が補助といふ事で、披露文を配つたが、
 むかうじま
 向島むさしやの武蔵屋おくざしきの奥座敷しづかが閑静で宜からう、丁度桜花も散
 しま
 つて了うた四月廿一日ごろと決したが、其披露文の書方が誠に
 おもしろ
 面白い。

「このたびむかうじまむさしやおいむかしばなしくわいごんざ
 一回向島むさしやの武蔵屋おんに於て、昔話の会が権三りやす」
 と書いた、是は武蔵屋権三郎を引掛たのだが何日とも日が認
 めてないから、幾日だらう、不思議な事もあるものだ、是は落字
 をしたのか知ら、忘れたのではないか、と不審を打つ者があると、

すきやがし まがほ、
 数寄屋河岸の真顔が、「イヤ是は これ 大方 おほかた 二十一日 にち であらう、「昔」
むかし

と云ふ字ハ、廿一日と書くから、まア廿一日 にち に行つて見なさい。

なるほど
 成程と思つて当日 たうじつ 行つて見ると、
のぼりなど 幟等 を 建て盛んに落語 はなし

の会 くわい があつたといふ。して見ると無理に衆人 ひと に聴かせよう、と云

ふ訳 わけ でも何 なん でもなかつたのでござります。

か、
 忤る事は わたくし 円朝 さつぱりぞん も薩張存 を ぜずに居りましたが、彼の談洲楼 だんしゅうろう

焉馬 うえんば が認めた文 よつ に依て承知 しやうち いたしました。其文 そのぶん に、

「夫羅山の口号 こうがう に曰、
まんえふしふ 萬葉集は古詩 こし に似たり、
こきんしふ 古今集は唐 た

詩 うし に似たり、伊勢物語 いせものがたり は変風 へんふう の情 じやう を発 はつ するに贗 にせ たり、源氏 げんじも

物語 ものがたり は莊子 さうし と天台 てんだい の書 しよ に似たりとあり。爰 こゝ に宇治拾遺 うぢしふゐもの 物語 ものがたり と

云へるは、
だいなごんたかくにきやうさつき 大納言隆国卿 はづき 臯月 びやうどうゐん より葉月 いつさい まで い 平等院 びやうどうゐん 一切

経きやうの山際やまぎは南泉坊なんせんぼうに籠こもりたまひ、あふさきさるさの者のはなし、
 高たつとき賤いやしきを云いはず、話したに従したがひ大おほきな草紙さうしに書かかれけり、貴たつとき
 事あはもあり、哀あはれなる事あはもあり、少すこしは空物そらものがたり語りもあり、利口りこうな
 事あはもありと前文ぜんぶんに記し置おかれたり、竹取物語たけとりものがたり、宇津保うつぼものが
 物語たりは噺はなしの父母ちちははにして、夫それより下しもつ方かたに至いたりては、爺ぢやうは山へ、
 婆ばやは川へ洗濯せんたく、桃ももの流れしと云いふ事ことを始め、其その咄はなしの種たね、天よ
 々うくとして其葉そのは秦しん々くたり。されば竹さへづに囀したきりる舌したきり雀すずめ、月おとがひに住おとがひ
 む兔うさぎの手柄てがら、何いづれか咄はなしに洩もれざらむ、力ちからをも入れずして顚おとがひのかけが
 ねを外はづさせ、高おいらんき華魁おいらんの顔かほをやはらぐるも是これなり。此この噺はなし日い
 つぞやしもひまちときひらきはじめしより、いざや一くわい会い催まよさんと、四方よも
 外下のの日待ひまちの時開とき始はじめしより、いざや一くわい会い催まよさんと、四方よも
 赤良あからうし大人あけらくわんかうし、朱楽管江大人しかつべまがほ、鹿都辺真顔おほや、大屋うらの裏住うら、竹杖たけづゑ

の為すがる輕、つむりの光、宿屋やどやの飯盛めしもりを始めとして、向島むかうじまの武蔵むさし

さしや蔵屋くらぐくに落語らくごの会わいが権三ごんざり升ますと、四方よもの大人うしの筆ふでにみしらせ、おの

えんばれ馬ばを判者はんじやになれよと、狂歌きやうかの友ともどちち一ひ百やく余まにん人にん、戯作げさくの口

 を開ひらけば、遠とほからん者ものは長崎ながさきから強飯こほめしの咄はなし、近ちかくば、寄よつて三

ます升めじるしの目印もんぜん、門前いちに市なを為なすにぞ、のど筒づの往來わうらいかまびすし

 く、笑こゑふ声こゑ富士ふじ筑波つくばにひゞく。時ときに天明てんめい四しツつの年とし甲辰えたつぐわつ

にち廿一日にちなり。夫それより両国りやうごく尾上をのへちやう町ちやう、京屋きやうやが楼ろうじやう上じやうに集しふく

わい会わいする事こと十歳とせあまり、之これを聞きくものおれ我われに語かたり、今いまは世渡よわた

 るたつきともなれり、峨江がこほ初はじめは觴さかづを泛きうめ、末すゑは大河たいがとなる噺はなしも末

 は金きん錢せんになるとは、借家しやくやを貸かして母屋おもやを取とらるゝ譬たとへなるべし、

 とは云いへ是これも大江戸おほえどの有ありがたき恵めぐみならずや。

よいおとしばなしとし 嘶なも年としも七十ななじゅうの

市いちが榮さかへて千代ちよやよろづよ

文化十癸酉春

談語だんご楼銀馬ろうぎんばの需もとめにおう応

じて

七十一しちじゅういち翁をう、烏亭うてい焉馬えんば

於だんしゅうろうきかにおいてのぶ談洲楼机だんしゅうろうきか下述か印ふ

右みぎは軸ぢくになつて居をりますが、三遊亭いうてい一派ぱの共有物きよういうぶつとして、

円朝わたくしは門弟もんでいども共はうの方あづへ預おきけて置おきましたけれども、是これは河竹かはたけ黙もく

阿弥翁あみをうが所しよいう有ありされて居あたのを、円朝わたくしが貰もらひ受うけました。夫それ

故箱書ゆゑはこがきも黙阿弥翁もくあみをうに認しためて貰もらひましたが、此文このぶん中ちゆうにもある

とほ 通り十有余年 昔 話が流行たことと見えます。夫ゆゑ誰も
 彼も聴に参る中に、可楽と云ふ者があつて、是は櫛職人でご
 ざりましたが、至て口軽な面白い人ゆゑ、私も一つ飛入に
 落語をして見たいと申込んだ。

すると此の狂歌師の中へ職人を入れたら品格が悪くなる
 だらうと拒んだものもあつたが、十二職人だつて話が上手
 なら仔細ないと云ふ事で、可楽を入れてやらせて見た所が、大
 層評判が宜しく、可楽が出るやうになつてから、一ト際聴
 手が殖えたと云ふ位。

そこで可楽が不図考へ附いた可「是は面白い、近頃落語が
 大分流行るから、何所かで座料を取て内職にやつたら面白

からう、事に依たら片商売になるかもしれない。と昼間は櫛
 を拵へ、夜だけ落語家でやつて見ようと、是から広徳寺前の
 ○○茶屋と云ふのがござりまして、其家の入口へ行燈を懸
 けたのです。唯「はなし」と書放しにして名前などを書いたも
 のではない、細い小さな行燈を出して、入らつしやいくと云
 ふと、大都會の事だから直に御武家が一人這入て来て○「早く
 して呉れ」「エ、もう二三人御入来になると直に始まります。○
 「モウ二三人来るまで待つては居られぬ、腹が空て耐らぬのぢや
 —是は菜めしと間違たと云ふ話です、其頃は商売では
 なかつたから、其位のものでござりましたらう。然るに当
 今に至つては寄席商売と云ふものが大層殖えて、斯様に隆

盛うせいに相成あひなつたのでござります。

(拋酒井昇造筆記)

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

落語の濫觴

三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>